第17回レーザーリプロダクション学会学術集会
WEB　2022.8.21～8.31

当院におけるLLLTの治療効果と波及効果

◎八百　麻衣子[1)] 清原　真理[1)] 松本　寛史[1)] 辻　勲[1)] 福田　愛作[1)]
森本　義晴[2)]
1）IVF大阪クリニック 2）HORACグランフロント大阪クリニック

当院では治療段階や患者年齢に関わらず、初診時から一日でも早く不妊治療に統合医療を取り入れることを推奨している。しかし、利用する患者の殆どは、不妊治療を開始してから少なくとも数か月、長ければ数年経過して、思うような結果が出ないことに不安や焦りを感じて、はじめて“採卵や胚移植に向けて他に何か出来ることはないか”と藁をもすがる思いで統合医療にたどり着くというのが現実である。LLLTを含む統合医療を利用する患者が、妊娠成立に向けてどのような効果を期待するのかアンケートを行ったところ、胚質の改善への関心が高かった。

そこで2019年から2021年にLLLTを始めた患者を対象に、LLLT開始前後の胚盤胞到達率と良好胚盤胞率の変化について比較検討を行った。施術内容は頸部・腹部・腰部の計10箇所にレーザーを照射し、頸部はレーザー照射と同時に筋肉の抵抗運動とマッサージを行った。胚盤胞到達率・良好胚盤胞率はLLLT開始前後でそれぞれ53.1% vs 60.4%（$p<0.05$）、24.1% vs 31.2%（$p<0.05$）と有意差をもってLLLT施行後に向上した。LLLT施行により胚盤胞到達率・良好胚盤胞率は改善し、LLLTは胚質の改善に有効であると考えられた。

しかし、これまでにもLLLTについて様々な研究発表はあるが、条件設定が一定せずその効果が科学的に立証されているとは言い難い。とはいえ、具体的な有効性の情報は、治療が難航している患者にとっては、統合医療に前向きに取り組める要素となると考えられる。また、不妊治療を開始した患者が、早期に統合医療を取り入れるきっかけになるのではないかと考えている。幸いLLLTには副作用がないので、安全性を確保したうえで、今後もLLLTを通じて患者の治療へのモチベーションを維持できるような工夫を模索していきたい。